私にとって大事なものってなんだろう。それを考えると真っ先に思い浮かぶのは、命じゃなくて友達である。人生を支えているのは友達であり、人一倍寂しがりやな私はもしも友達がいなくなったら死んでしまうだろう。

そして最近、間近に迫った学校祭の準備に追われている。香蓮高校は、いまいち学校祭の盛り上がりに欠けている。そして自分のクラスは特に欠けている。私はそれが気に食わない。

だから、最後の学校祭くらいは楽しみたいと思い、自ら積極的に準備に取り掛かっている。幼稚園からの付き合いであるクールな笠原夏海、中学からの知り合いの、この子以上に可愛い子なんていないんじゃないかと思わせるほど美人な千瀬奈々。そして高一で知り合った、昔はグレてかなりヤバかったけど、今はおとなしい愛敬りこ。

この三人の友達は、特に大切な友達だ。この子たちと一緒に学校祭を出来ることが、凄く幸せ。

私を含めたこの四人で、クラスのみんなをまとめている。みんな学校祭なんてやる気ゼロって感じだったけど、いざやり始めると戦時中の日本軍かのようにやる気を出して動いている。

結構、楽しんでた。でも、そんな日々に釘をさすことが起きた。

私達四人は、放課後何故か校長室に呼ばれていた。校長はゴキブリを見るような目で私ら四人を見ている。隣にいる教頭はそれとは逆に、私達のことを真剣な目で見ている。見てて嫌じゃない目。生徒をバカにしていない人なんだなと、ハッキリとわかるような目だ。

校長がなかなか喋りださないので、夏海が口を開いた。夏海の声は低いけど、濁ってなくて、発音がよくて聞き取りやすいので好きだ。

「私達に何の用ですか。なにもした覚えはありませんけど」

そうだ。何もやっちゃいない。なのに、なんで私達はここにいる？　せっかく高三になって、入学当初に持っていた学校や教師に対する憎しみや悔しさなどの負の感情が、大分おさまってきているのに何がなんだかわからないまま、校長室に呼ばれたらまた憎しみとか、そういう感情が私を支配しちゃうじゃないか。

教師は死ぬほど嫌いだったけど、教師にも色々あるとわかったし、でもやっぱり良い教師とダメな教師がいるのもよくわかった。私達は、ダメな教師は眼中に入れなければそれでいい。良い教師だけを見ていればいい。それで間違いは無い。

校長は、ふっと笑った。私は校長の心を読んだ。なんだこの生徒突っかかってきて。いるんだよなぁ、こういうの。

顔に出てるんだよ。バーカ。校長はニヤリと笑いながら夏海を見た。気持ち悪い。夏海が顔をしかめた後、校長は言った。
「君たちはね、退学になる可能性がとても大きいんだよ」
「は？」
ふいに声がもれた。夏海は細くてキリッとした目を大きく見開き、奈々は下着を盗んだ変態親父を見るような目で校長を見て、りこはポカンとした顔をしている。
何がなんだかわからない。普段なんでも口にする夏海も、さすがに口をパクパクさせている。奈々はそんな夏海をチラッと見て、言った。
「なんもした覚えないんだけど？　アンタ、場合によっちゃ殴るわよ」
校長が机を思い切り殴り、立ち上がってなにやら怒鳴りだした。おいおい、マジかい。いきなり呼び出されて退学だと言われ、なんかキレられちゃったよ。
すると、教頭が校長を抑えて、なんとか座らせて言った。
「そうだよな。いきなり言われても困るよな。千瀬君、悪かった。私がちゃんと説明するからね」
奈々も、こいつはまともだと思ったらしく、頷いた。
「昨日の月曜日、平倭先生が空き教室でリンチにあった事件は知ってるね」
もちろん知っている。ちなみに平倭とは、生徒に耳をふさぎたくなるような悪口を言ったり、気に食わない生徒の悪口を他の生徒に言ったり、髪の長い生徒の髪を無理やり切ったり、授業中タンを吐きに水飲み場に行ったりする、ダメ教師である。年は六十八歳。正直こんな教師が平気で授業をやっているこの学校は終わってると思う。教師達は、恥じるべきだとも思う。
この教師のことを、頭の良い私立の明清東高校に通ってる子に話したら、そんな教師いるわけないじゃん。大袈裟に言ってるだけでしょ？　と言われてしまった。でも、本当なんだよね。ありえないとかそんなの漫画とかドラマの中だけだろとか言われても、本当にいるんだからしょうがない。
で、この平倭が昨日の夕方頃に、空き教室でリンチされた。誰かは、わからない。
私は平倭のことは死ぬほど嫌いだけど、それでもリンチしたいと思ったことはない。いったいどこの誰が、どれほどの負の感情を抱きながら、そんなことをしたんだろう？
「それでね、どうも平倭先生は佐伯可奈子、笠原夏海、愛敬りこ、千瀬奈々の四人がやったと言うんだよ。いやね、犯人はサングラスをかけてて、更に帽子もかぶってたからよく顔は見えなかったらしいけどね」
教頭がそう言うと、校長は「それで君たちは評判が悪い」とほざきだした。

それを聞いて教頭は、一瞬だけど校長を睨んだ。
心臓がゾクゾクと震えて、体の中のものを全て吐きそうになった。それで校長は今退学になる可能性が大きいと言ったから、犯人はもう私達だと決め付けている。平倭が私達のせいにしたことより、犯人は私達と決め付けてる校長の方が百倍憎い。
奈々と夏海がキレて、ほぼ同時に校長の机を蹴り上げた。短いスカートから見える細い足から繰り出されたとは思えないほど、強い力だった。セーラー服を着た奈々は、清純で、大和撫子は奈々のためにある言葉だと思わせるほど似合ってるけど、今の奈々は凄まじい剣幕で校長を睨んでいる。大和撫子とは言いがたい。
夏海は、もともと少し目がキツイので迫力がある。童顔の私とは大違い。……と、私は場違いなことを考えていた。本当は私もキレて、校長の顔面に一発か二発くらい食らわせてやりたいけど、二人もキレたんじゃ私は冷静になるしかない。一年の時なら確実にキレてただろうけど、私は高校生活の二年と半年で、色々なことを諦めることが出来てしまったし、冷静になることも出来るようになった。
夏海が、大声で言った。いつもの低い声が嘘かと思えるほどに、甲高くて太い声。アンタ、そんな声も出せるんじゃない。
「ふっざけんなよこのハゲ！　私らじゃねぇよ。つーか証拠も無しに私らのせいにした平倭は最悪だけど、アンタも最悪だ。平倭と同じだよ！」
校長が何か言おうとしたとき、りこが顔を覆って泣き出した。声には出さないけど、鼻をすすって、涙をぽろぽろと流す。
とっさに奈々がりこの頭を抱いて、なだめようとする。それを見て、私はキレた。
確かに私は入学当時に比べておとなしくなったさ。色々な事を判別することも出来るようになった。でもね、友達を泣かされて黙ってる私じゃない。命より大事な友達を泣かすなんて、泣かしたやつは死刑だ。
「おい。何りこ泣かしてるんだ。謝れよコラ。この性格破綻者！」
校長は顔が爆発するんじゃないかというほどに顔を真っ赤にしている。教頭が言った。
「と、とりあえず。話しを聞きたかっただけなんだ。校長。話しはまた今度、私が聞いておきますので」
そう言って、教頭は私達四人を廊下に強引に出して、ドアを閉めた。
三人でりこをなだめて、りこが泣き止んだところで、なんと驚くことに教頭は頭を下げた。

「悪かった。本当なら私が、この子達はやってませんと言うべきだった。でも、校長の前でそういう事を言うのは難しいんだ。はっきり言ってね、私は平倭の狂言だと思ってる。確かに君たちは、その……。あまり教師の間で評判が良くない。でもね、君たちは学校祭の準備を頑張ってる。一度、廊下から見させてもらったよ。それに佐伯君は友達がとても多いと聞く。それは君の人格が良いことを示している。千瀬君に笠原君も、教師に注意されたら素直に受け止めれると聞いてる。愛敬君は……特に何も聞かないから、良い子なんだろう。だから、私達は君たちみたいな良い子があんな事件を起こすわけがないと信じてる。君たちが犯人だなんて、バカげた話しだよ」

そう教頭はまくしたてると、校長室に戻って行った。

ったく。今すぐこの教頭が校長になるべきだ。もしも教頭すらダメなセンセイだったら、私はもっとキレてた。

私達は廊下に座り込んだ。やりきれない。やってらんない。もう人生どうでもいい。こんな人生なら、楽しく生きようなんて思えない。

でも、教頭先生のためにも、そういうことを思うのは止めなきゃいけない。私達は、ダメなセンセイのせいで潰れる必要なんてない。

泣き止んだりこが急に私達を鋭い目で見つめて、言った。

「このままじゃ絶対終わらせないから」

それはつまり、新しい犯人を見つけ出して、校長に頭を下げてもらうということだろう。

りこの宣言を聞くと、私達は教室に戻った。今日はもう学校祭の準備は終わっている。作戦会議だ。

教室に戻ると、女子が二人、残って雑談をしていた。

そんなに仲良かったわけじゃないけど、学校祭の準備のおかげで仲良くなった。

私達が鞄をしょって帰ろうとすると、二人のうちポニーテールの子が話しかけてきた。

「あ、ねぇ可奈ちゃん。知ってる？」

「何を？」

「平倭さ、空き教室にいたっていうじゃない？　なんかね、鍵閉めてたらしいよ」

「鍵？　なんでまた」

「わからない。でも、何してたんだろうねぇ」

なんか、裏がありそうだな。私は「わかんないけど、なんか怪しいね」と言

い返し、四人で教室を出た。
帰り、三人を自分の家に呼んだ。このまま解散する気にはなれないし、する気もない。
私の部屋は、ぬいぐるみやら化粧道具やらＭＤやらが散乱してて、とても汚い。そして音響オタクなため、スピーカーがかなり場所を取っている。リアスピーカー、フロントスピーカー、センタースピーカー、サブウーハー。その他たまにしか使わないスピーカーが数個転がってる。
「うわっ。おい可奈子。酒の缶転がしっぱなしかよ」
夏海が睨みながら言った。
「可奈ちゃん。ぬいぐるみ、スピーカーの下敷きになってるよ」
りこはそう言いながら、潰れたスティッチをスピーカーの下から救出した。
私は小さいテーブルを部屋の真ん中に引っ張り出し、よっこらせと座った。夏海と奈々はパンツ丸出しであぐらをかき、りこはちょこんと正座をする。
四人、目が合った。少しの間沈黙が続いたけど、夏海が口を開いた。
「酒」
「……あいよ」
私は台所に行き、ビールを四つ持って部屋に戻った。すると、さっきまで何も乗っていなかったテーブルにはおつまみやらスナック菓子やらが置かれていた。
とりあえず一口飲むと、りこが言った。
「ねぇ、私マジでムカついたの。絶対に真犯人を、私達が見つけて校長に謝ってもらわないと。ね、可奈ちゃん」
「そりゃあね。でさ、私気になるのがやっぱ、なんで空き教室で、しかも鍵をかけてたかって事なんだよね」
夏海が、タバコを咥えながら言った。
「怪しい事をしてたのは確実だよなぁ。鍵をかけてたってことは、もちろん見られたくない事をやってた。さて、見られちゃいけないって事で思いつくことはなんだろう？　はい、奈々。言ってみ」
「そうだなぁ……。タバコとか」
「それは生徒視点だろ。教師の視点で考えて。次りこ」
「なんでアンタが仕切ってんのよ」
「可奈子は黙ってて」
りこは人差し指でうーんとしばらく唸って、言った。
「えぇと。お、女の子となにやら怪しげなことをしてる所とか……？」
四人、また見つめあい、今度はニヤリと笑いあった。「それだね、絶対」と、

奈々が呟き、私は頷いた。
　これは、かなり平倭を攻める材料になりそうだ。まぁ私達が何も言わなくても、すぐに問題になるだろうけど。でも、もしそうだとしたら、その女子生徒は誰なんだろう？　噂が流れてもいいと思うんだけど、そんな話しは全然聞いてない。っていう事は、やっぱり違うのかなぁ。
　ていうか、ふと疑問が浮かんだ。
「てか夏海。それじゃ犯人に繋がらないよ」
「いや、だからさ。もしそうだとしたら、その時空き教室には平倭だけじゃなくて、女子生徒もいたことになる。もしも私達の考えが当たってたら、その子に聞けば、犯人がどんな感じだったかわかるんじゃないかなって」
　なるほどね。ま、あくまでも想像のレベルでの話しだけど。
　私達は、苛立ってる。でも、人間誰でも、生きていれば苛立つことは悲しいくらいに沢山起こる。理不尽なことだって避けられない。それが生きるってことだ。
　でも、今回のことは、理不尽で終わらせてはいけない。これは、あっちゃいけないことなのだ。起きてはならないことだった。こういう時、諦めたらいけない。なんとかしなきゃいけない。
　開け放った窓から、秋の風が入ってくる。いつもなら心地良いはずなのに、今日はそうでもない。
　札幌は十月。もう十分に、風は冷たい。気づけば冬になり、冬を越えると卒業だ。
　私たちは卒業に向けて、アクセル全開で最後のラストスパートをかけようとしている所なんだ。ここでブレーキをかけるなんてこと、私はしたくない。絶対に犯人見つけ出して、誤解を解かなければならない。
　この日は九時ごろまで騒ぎ、みんなが帰ったらすぐに寝た。一人部屋でぼーっとしてたら、色々考えちゃってダメだからだ。

　うちのクラスで、昨日休んだ生徒がいた。星坂優衣菜。
　高二から同じクラスだけど、星坂さんとはあまり話したことがない。星坂さんはおとなしめな人で、酒盛りをしたり街に繰り出すということをあまりしないらしい。
　見た目は目がくりくりしてて、守ってあげたくなるような雰囲気を漂わせている。
　そんな星坂さんが、今日学校に来るなり私達女子に「平倭に体を触られた」と宣言したもんだから、さすがに驚いた。

私達の推理が当たったいたとはいえ、まさかその女子生徒が星坂さんだったなんて。
でも、ちょっと不思議だ。そんなことがあったら、平倭はさっさと何か処分があるはずだし、もっと大事になってもいいだろう。新聞に載ったリンチ事件の記事にも、女子生徒のことは何も書かれていなかった。星坂さんは、学校側に言わなかったのかな？　いや、そんな訳ないよなぁ。
うーん。なんかピンとこない。
よし、聞いてみよう。
「ね、星坂さん」
星坂さんは席に座ってぼぅっとしていたけど、話しかけるとさらさらの長い髪をかきあげ、「なぁに？」と言った。
「体触られたって、本当なの？」
リップで唇を塗りながら、星坂さんは言った。
「触られたっていっても、腕とか足とか触られただけ。どんどん行動がエスカレートするだろうって時に、変なやつらが窓破って入ってきたからさ」
なるほど。確かにそれだけなら、精神的ショックはそんなに大きくなくても自然かな。
「そっか……。ね、犯人達、どんな顔だった？」
「わかんない。サングラスに帽子だったから」
うぅん。グラサンに帽子なんて、銀行強盗みたい。
平倭との関係とか、なんで空き教室に行ったのかとか聞きたいことは沢山あったけど、あまり聞くのはさすがに酷だろうと思い、これ以上質問するのは止めた。体触られた後に、いろいろ聞かれるのは気分悪いだろうし。
星坂さんの席から離れようとしたら、仲の良い子たちが数人近寄ってきた。
「ね、可奈子。アンタさ、リンチの犯人に疑われてるって本当？」
「可奈ちゃんそんなことするわけないもんね。平倭の狂言にもまいるよねー」
「ん、まぁね」
「えっ。佐伯さん、疑われてるの？」
「そうなんだよね。ま、平倭の狂言だけど」
星坂さんは、一気に顔が真っ青になった。そして、目がキョロキョロしだす。
「ご、ごめんね。私がちゃんと犯人見てれば……」
そう言ったけど、星坂さんの声はとても小さく、頼りないものだった。
少しすると担任がやってきたので、私は席に戻る。また、つまらない授業が始まる。数学の計算式も、日本の歴史も、私にとってなんのためになるんだろう。勉強はテストのためにするもんでしょ。どうせ、すぐ忘れちゃうし。

他にやるべきこと、あると思うんだけどな。私達は。
授業をほとんど寝て過ごし、放課後。今日も学校祭の準備だ。学校祭当日まで、あと三日しかない。
私達のクラスはフリマをやる。これがなかなか豪華なものが集まって、ゲームやらぬいぐるみやらギターやら、その他膨大な数の小物などが集まった。軽く店でも開けるんじゃないかと思うほどだ。
ちなみに私が持ってきたのはいらないゲームとぬいぐるみと、部屋に転がってた携帯灰皿などなど。担任は私の持ってきたものを見ても、特に何も言わなかった。
夏海やりこも、妥当にぬいぐるみやゲームやＣＤに漫画などを持ってきた。りこは漫画をちゃんと一巻から揃えて持ってきたのに対し、夏海はドラゴンボールの七巻と十五巻を持ってきた。あと、数年前のサンデー。
奈々は、化粧道具をたんまり持ってきてくれた。それを見て、この女はそれ以上美人になって、どうするんだろう？　と、一瞬思ってしまった。奈々に上目遣いで微笑まれると、女の私でもたまにドキっとする。きっと奈々なら、釣竿に餌つけなくても、笑いが止まらなくなるくらいに獲物が釣れるだろう。実際、奈々は彼氏と付き合っては別れてを繰り返してる。
それは奈々の性格に問題があるわけではないと思う。確かに少しキツイ性格をしていて、あまり優しさを見せないけど、なんだかんだいってさりげなく構ってくれるし、優しい言葉をかけなくても、気にかけてくれたりしてるのは、態度でわかる。夏海も不器用だけど、奈々はとてつもなく不器用だ。
そして奈々は、好きな人が出来ないらしい。不器用なのもあって、なかなか付き合ってもうまくいかないんだってさ。美人にも美人なりの、いや普通の女の子らしい悩みがあるらしい。
「ねぇ奈々。化粧道具以外にもさ、なんか持ってきてよ。私スーファミのソフト持ってきたから、アンタは本体持ってきてよ。ソフト五本とセットで千円。どうよ？　ちなみに私のはもったいないから持ってこない」
「そんなの持ってないけど、もっといいの持ってきた」
そう言うと、奈々はスカートのポケットから一枚の紙を取り出した。
「ネットで見つけたから、わざわざ印刷してきたんだよ」
見ると、紙には一人の女が写っていた。前髪がすこしギザギザで、丸顔で、童顔。肌はちょい白くて、目が大きい。
「ってこれ私に似てない？」
「うん。これ、桃井理奈っていうＡＶ女優。アンタにめちゃくちゃ似てたから見せようと思ってさ。これ五十円。どうよ？」

私はその紙をくしゃくしゃにして投げた。その投げた紙はりこの頭に当たり、りこは紙に印刷された女を見て首をかしげながら私をチラ見したが、戸惑いながらもゴミ箱に捨てた。
「奈々。もっとマシなもんないの？」
「じゃあ、明日服でも持ってくるよ」
そう言うと、奈々は小さい紙に値段を書き始めた。ギター五千円。漫画一冊五十円。レトロゲーム百円。でもドラクエは三百円。私の持ってきたペンダントは五百円。
ちなみに、うちはフリマ以外にもダーツと射的をやる。ダーツと射的のどちらかをやれば、得点によってフリマの商品から好きなのを選べるのだ。
そしてダーツをやろうと言い出したのは私なので、少し前に小さいダーツの的をダイソーで買ってきたんだけど、担任にそんな小さいのダメだと言われてしまったので、今日はダーツの的を買いに行くことになってる。そして明後日は授業がなく、完全に準備の日となっている。つまり、もう準備のラストスパートにかかっている所なんだ。さっさと新しい、大きなダーツを揃えなきゃ。
「ねぇ夏海。私一人で行くの寂しいから、ついてきてよ」
夏海は奈々やりこと値段の相談をしていたけど、頷いてくれた。
すると、面倒くさそうな顔で、大量に印刷されたダーツをやるためのチケットをひたすら一枚、一枚と切っていた加藤梨花が立ち上がった。
「私も行く。こんなちまちました作業やってらんない。あと、教室で趣味に合わない音楽も聴いてたくない」
商品やら紙やらが散乱した教室の端っこに、職員室から持ってきた古いラジカセがある。当日はもちろん音楽を流すので、そのためにＣＤに音楽を焼いて持ってきて、今流してる。
「ついてきてくれるのはいいけど、趣味に合わない音楽って何よ。ジャンヌは神だろ」
「私は銀杏ＢＯＹＺが聞きたいね」
「うるさいなぁ。ジャンヌが一番なの！」
私がそう叫ぶと、夏海は私の襟首をひっつかんで、廊下に引きずり出した。
「おい、早く行くぞ」
ってことで、私達は学校を出た。学校を抜け出して何かを買いに行くのって、なんか、良いよね。
夏海が、どうせダイソーに五百円くらいで大きいの売ってるだろと言うので、そこに行くことにした。梨花はいつの間にか自販機で買ったコーヒーをぐびぐび飲んでる。

私は、梨花が少し苦手。完全に不良だし、性格はかなり悪い。口は夏海や奈々よりも更に悪い。それに夏海や奈々は口調はキツイけど、ほとんど冗談だし、直接的な悪口は言わない。人に嫌なこともしない。

でも、梨花は人に悪い事を言うし、うざったらしい悪口も沢山言う。それに、とんでもないこともする。気に食わない人の靴に生卵入れたり、突っかかってきた女子にカミソリを向けたりする。梨花なら、何をやってもおかしくない。それこそ、リンチをやってもおかしくない人だ。

梨花は圧倒的な髪のボリュームをワックスでうまくいじり、後ろの部分はパーマをかけていて、色はところどころ赤っぽい。スタイルは抜群で、超ミニのスカートから出た足は細くて正直羨ましい。

厚い化粧なんかしなくても、十分イケてるのに、もったいない。ま、どんなに可愛くても、奈々にはかなわないけどね。

「ねぇ佐伯。アンタ、平倭嫌い？」

と、梨花は通り行くバスを見ながら行った。学校は街中にあり、ダイソーまでは二十分ほど街を歩かなきゃつかない。駅、建築中のマンション、パン屋、カラオケ、幾つものコンビニ、怪しい店、ダイエー。この街には、なんでもある。

風が強くて、梨花のボリュームのある髪はゆらゆらと揺れている。

「死ぬほど嫌い」

「ふぅん。じゃ、アンタがリンチしたんだ」

「ちげぇよ」

と、夏海が低い声で言った。夏海は私が何か言われると、いつもぶっきらぼうなくせに、すぐに助けてくれる。夏海はとても頼りになる女の子なので、どうも私は夏海に頼ってしまう所がある。

「それを言うなら、加藤はどうなんだよ。お前ならリンチくらい平気でやるだろ」

「笠原キッツイなぁ。ま、リンチしてもよかったけどね。私じゃないよ。つーか、新聞見たけど、犯人たちは複数だったらしいね。私なら一人でやる」

梨花はそう言って、缶をゴミステーションに放り投げた。

しばらくぼそぼそと、進路のことについて話していると、梨花が急に話しを変えた。

「ね、なんで佐伯と笠原はさ、学校祭頑張ってんの？」

「梨花みたいに、やる気ない奴見てるのムカつくから。私は学校祭は楽しみたいのに」

「私も可奈子と同じ。加藤なんか、誰かに何か言われないとなーんも出来ない

しね」
　夏海がそう言うと、梨花はうるせぇなぁと甲高い声で言って、夏海を小突いた。すると夏海も負けじと小突いた。私もノリで小突いた方が良いのかと思って梨花を小突いたら、思い切り弾き飛ばされた。あれ、私、そんなに華奢？
　いや違う。梨花がでかすぎるんだ。私は百五十五センチ。夏海は百五十八センチ。りこは百四十五センチ。そして私らの中で一番大きいのは奈々で百六十一センチ。それに対して、梨花は百六十八センチもある。そこらへんの小さい男子よりでかい。
　もう少し身長欲しいなぁ。スタイルよくなりたいなぁ。可愛くなりたいなぁ。ていうか童顔どうにかなんないかなぁ。
　そんなこんなで、ダイソーに着いた。女子高生三人でぞろぞろとおもちゃ売り場に向かうのは、なんか変な感じ。
「あ、夏海。この三百円のやつ、でかいよ」
「いや、それよりもこっちの五百円のにしよう。矢五本ついてるし、三百円のよりもでかいし。それに学校祭の予算で買うんだから、なるべく沢山使ってやろう
　夏海がそう言うと、梨花が隣に置いてある矢の三本セットを手に取った。
「矢はついてるみたいだけど、沢山あるにこしたことないでしょ。矢も別にいくつか買っておきましょう。あ、それと針のタイプだけじゃなくて、磁石のも買おうよ。やっぱ笠原の言うとおり、学校の金で買うんだから、沢山買ってやりたい気分になるわ」
「そうだね。じゃあさ梨花。射的の的も買おうよ」
　ダーツをやろうと言ったのは私だけど、射的をやろうと言ったのはクラス全体だった。子供はダーツよりも射的をやりたがるんじゃないかって考えらしい。
　で、エアガンだけど、それはエアガンマニアの加藤梨花が全て用意した。私達は、もちろん小さいハンドガンを持ってくるのだと思ってたけど、梨花は何を勘違いしたか大きめの電動ブローバックのエアガンを三個持ってきた。なんで射的をやるのに連射できるエアガンが必要なんだとみんなで抗議して、やっと小さいハンドガンを持ってきた。学校祭は、くだらないことでよく揉めたりする。
　結局、的五百円。矢の三本セットを三つで三百円。射的の的二つで二百円。合計千円となった。予算は三千円だから、これでも二千円余る。本当は全部使いたいけど、それだとさすがに担任がキレそうなので止めた。
　学校に戻って担任に報告すると、案の定なんでダーツ買うだけで千円もかかるんだとかぐだぐだ言われたけど、気にしないでさっさと教室に戻る。

出かける前には結構な数がいたけど、戻ってみるとほとんどの人は帰っていた。奈々とりこはもちろんいたけど、飽きてきたのか奈々はりこの髪をいじって遊んでいる。

「りーこー。ツインテールはどうよ」

「ダサイよ」

「じゃあポニテ」

「後ろ髪そんなに長くないからちょんまげになるよ」

「いいよ、ちょんまげで」

と言って、後ろ髪をまとめていく。ボブカットをポニテにしてどうする。

梨花は、もう何もやらなくていいと感じたらしく、鞄をしょって「じゃあね。りこちゃん」と言って、りこの頭をぐしゃぐしゃと撫でて帰って行った。

梨花はほとんどの人に敵意を持つ傾向にある。私や夏海や奈々は、何故か勝手に同類だと思い込んでるらしく、別に敵意は持ってないらしい。持っていたら買い物になんか付き合わないだろうし。

で、おとなしい子がめちゃくちゃ嫌いだと、前言っていた。だから本当はりこみたいな静かな子は嫌いなはずなんだけど、今みたいに頭を撫でたりするし、結構好いてると思う。りこは、人に嫌われることはほとんどない。りこはそういう力を持ってる。それにりこはおとなしいけど、心の底にはかなり熱く、鋭いものを持っているし、勉強できないとか言ってるけど、知識や判断力はかなりのもので、それを隠してるふしがある。

「ね、二人とも。ダーツ買ってきたよ」

「可奈ちゃん、それやたらでかいね」

りこに的を渡すと、壁に画鋲を刺したけど、その位置じゃあ低すぎる。奈々が、自慢の長いプリンセスカットを掻きあげながら言った。

「だっこしようか？」

「嫌だよ恥ずかしい。奈々ちゃんつけて」

「ダメよりこ。チビだからってなんでも諦めちゃ。お姉さんがだっこしてあげるから」

そう言うと、奈々はりこを後ろから抱きしめると、一気に持ち上げようと……した。

奈々は非力だ。ほっそい体を見ればわかる。奈々はしばらくうんうんとりこを持ち上げようと頑張ってたけど、無理だと諦めてりこを解放した。奈々とりこを見てると、どことなく仲の良い姉妹に見える。

奈々が悔しがっていると、夏海が「私に貸して」と言って、おもむろにりこを後ろから抱きしめて、思い切り持ち上げた。

「凄いじゃん夏海。アンタって、何事もちゃんとこなすっていうか、なんでも出来ちゃうよね」と、奈々が笑いながら言って、確かにそうだと心の中で同意した。
「ほら、りこ。早く画鋲」
「う、うん」
りこは画鋲を刺し、そこにダーツをぶらさげようと……した。
バカでかいダーツの的は床にゴトンと落ちた。考えてみれば、そりゃそうだ。でも、私らは全員落ちるなんて考えてもいなかった。
「ねぇ夏海。画鋲じゃ無理だよ」
「そうだな。じゃ、可奈子。お前当日ずっと的持ってろ」
「外れた矢が私に刺さるじゃん！」
「いや、お前津波に飲まれてもミサイル落とされても死ななさそうだし」
「死ぬから」
りこはおなかをおさえて、床に崩れ落ちた。
さて、今は亡きりこは置いといて、困ったな。学校祭って、ほんっとにこういう以外な、くだらないことで壁にぶち当たる。どうしよう。的が飾れなかったら、ダーツにならないぞ。
三人でしばらく考えていると、腕を組んでいた夏海が静かに頷いて「釘だな」と呟いた。
「釘打ち込んで、そこにぶらさげよう。可奈子、行って来い」
「私はアンタのパシリか」
「別に誰でもいいけど」
すると、りこが生き返った。じゃなくて起き上がった。「私行くよ」とニコッと笑いながら言って、その笑顔が可愛かったので、私もついていくことにした。
私達は技術室に行くため、三階から一階に下りた。
ていうか、技術室ってどこだ？　むしろ技術室なんてこの学校にあるのかな。理科室だって行ったことないし。
それでも特別教室が並んでる一階の端っこを歩いていると、技術室を見つけたので、中に入る。
「ねぇりこ。釘使うなら、センセイに言った方がいいのかな」
「いいよ面倒くさい。釘ごとき勝手に持ってこう。あ、トンカチあった」
私はりこのこういう所、案外好き。ここでいちいちセンセイに報告しなきゃダメだよ！　とか言われたら実際うざいしね。報告する気なんて自分には全く無いのに、一応聞いてみる私って、なんなんだろう。
りこは釘とトンカチを持つと、さっさと技術室から出て行った。

教室に戻ると、奈々が釘を打ち付けたが、釘はあっさり曲がった。奈々に力仕事やらせるのは、今後一切止めておこう。

そしてやっぱり、夏海はあっさりと、綺麗に釘をうちつけ、的を飾った。夏海は香蓮みたいな、学力が底辺の高校にいるべきじゃない。夏海は札幌市内のトップクラスの県立高校に行ける頭の持ち主だ。それに、今みたいに力仕事もなんなくこなす。

せっかく、色々なことにおいて才能があるのに、率先して何かをやることはないし、発揮することもあまりない。人が失敗してから、やっと腰を上げる。それはなんでだろう。本当はやってあげたいんだけど、自分からやるって言うのは、恥ずかしいのかな。

今日はもう帰るかと思い、自分の鞄を探した。教室の後ろには景品が入ったダンボールやら、みんなのジャージを入れる鞄やらが放り投げてある。私も鞄は教室の後ろに放り投げてある。

でも、驚くことに、私の鞄はどこにもなかった。

「私の鞄がない！」

そう叫ぶと、三人はキョロキョロと当たりを見回し、探し出した。そしてまだ残ってトランプをしていた、友達の栗山里奈がこちらを振り向いた。

「あれ、やっぱあの鞄可奈子のだったんだ」

「は？　どういうこと」

「いや、可奈子たちが出かけた後、星坂さん帰ったんだけどさ、そろそろ生徒会の方にも顔出さないといけないとか言って、慌てて鞄引っつかんで帰ったんだけど……。可奈子の間違って持って帰ったっぽいね」

「うっそぉ……」

最悪だ。確かに私と星坂さんの鞄は同じ色だし、付いてるストラップも同じリラックマだ。とはいえ、それは慌てすぎじゃないか。それに、そこまで慌てるほどの用事なら、何も無理して残る必要はなかったんじゃないか。

でも、まだ生徒会室に残ってるかもしれない。

「じゃあ帰る前に、生徒会室寄ってみるよ」

生徒会室は四階の端だから、行くのめんどくさいけどね。

里奈が「うちも帰る」と言って腰を上げたので、私は教室にちゃんと鍵を閉めて、みんなでぞろぞろと教室を後にした。

もちろん四人で生徒会室に寄ると、何故か生徒会室前の廊下に梨花がいた。気のせいか、顔が少し白い。夏海が聞いた。

「お前何してんの。帰ったんじゃないの？」

「いや、それより。あれ……」

と言って、ドア越しに教室の中を指差した。
覗くと、なんとそこには手首から血を出して、目を瞑って倒れている星坂優衣菜がいた。机の上には、私の鞄が置いてある。
「星坂さん！？」
慌てて駆け寄ると、星坂さんはパッと目を開いてこちらを向いて、ギョッとした顔になった。
「え、あれ？　み、みんな……？」
そう呟くと、梨花は叫んだ。
「アンタ、血出てるじゃん。立てるか？」
星坂さんは、意外にもそんなに辛そうな顔はしていなかったけど、梨花はそんなことも気にせず、星坂さんをひょいっとおんぶし、「保健室！」と叫び、階段に向かって突進して行った。
沈黙が流れた。一体、何が起きた？
平倭のリンチに、今の星坂さん。一気に日常というものが、ガラガラと音を立てて崩れていくような気がした。
普通じゃない。これは普通じゃない。何かありえないことが、確実に起きている。
夏海は、冷たい瞳で生徒会室を睨み、りこは目をパチパチさせ、奈々は意外にもかなりうろたえた顔になっている。そして呟いた。
「だ、大丈夫かな。血、血出てた。血……」
普段優しい素振りなんて見せないくせに、いざとなったら人一倍心配するんだよね、奈々は。とか、そんなこと考えてる場合じゃない。
私は鞄を引っつかみ、梨花の後を追った。三人も、私を見てハッとし、駆け出す。
全く。学校祭の準備期間中くらい、平和に過ごしたいもんだよ。

保健室の前に行くと、星坂さんをおんぶした梨花が突っ立っていた。
「何してんの？」
「考えてみれば、もう六時だ。保健のセンセイ、いるわけない」
確かにそうだ。なんで私たちはこんなにも無鉄砲なんだ。
「あ、えっと。別に、大丈夫だよ。そんな強く切ってるわけじゃ……」
星坂さんがそう言うと、梨花は星坂さんを降ろし、廊下に座らせた。奈々が鞄から急いで絆創膏とハンカチを取り出す。
ハンカチで血を拭き、「ば、絆創膏貼るべき？　それよりハンカチで縛るべき？」と、あたふたと言い、夏海が「別に血ドクドク出てるわけじゃないだろ。

傷も浅いし、絆創膏で十分だ」と、冷たい口調で言った。
奈々がせわしなく絆創膏を貼ると、夏海が言った。
「お前、あそこで何してた」
「生徒会の仕事だけど……」
「誰にやられた」
「……」
「おい、言わなきゃわかんないだろ」
「夏海やめなって」
あまりにも夏海がキツイ口調で聞くので、止めた。
星坂さんは落ち着いているようだし、それに私達に出来ることなんて何もない。
「ごめんね。今日は帰るね。……ありがと」
と言って、星坂さんは玄関の方へ行ってしまった。自分鞄、忘れてるよ。
どうしようかと困っていると、夏海が梨花を睨んだ。
「アンタさ、なんで生徒会室の前にいたの」
「別に。四階の情報処理室に用があったのさ」
情報処理室は四階の端。生徒会室はちょうど四階の真ん中あたりにある。
「情報の野中にちょっと相談したいことがあったの。で、相談が終わったあとに情報処理室から出て、ふと生徒会室見たら、倒れてる星坂見つけたんだ」
「来た時は気づかなかった？」
「うん。その時もう倒れてたのか、倒れてなかったのかはわからないけど」
なんか臭う話しだな。違和感を感じる。それが何かはわからないけど、今回の事件はハッキリ言っておかしい。
でも今出来ることは、帰る事ぐらいしかないんだよね。
私達は玄関へ向かった。でも、まだ帰りたくは無い。
黙っていたりこが、突然口を開いた。
「ねぇ、コロポックルコタン行こうよ」
私達は黙って頷いた。
コロポックル・コタン。西区の端っこにある喫茶店で、木を基調としたデザインが雰囲気を出していて、とても気に入っている。メニューも多いし、味は格別。
チャリを走らせてコロポックル・コタンに行き、店の左端の席に座る。
「平日なのに、こんな遅い時間に来るなんて珍しいじゃない」
と、知り合いであるウェイトレスの稲緒真里菜が言った。
私はカフェオレ。夏海はブラックコーヒー。奈々はアイスコーヒー。りこは

オレンジジュース。すぐに真里菜は注文した品を持ってくると、何故か自分も席に座った。
「……は？」
「いや、もう閉店の時間近いし、お客さんいないからさ。ほら、話し聞かせてよ」
「え」
真里菜はニコリと笑い、「超深刻な顔してるよ。さ、話してみて。相談に乗るよ」と言った。私ら、そんなに深刻な顔してたのか。
私達は顔を見合わせたけど夏海が頷いたので、私は平倭リンチ事件の話しと、ついさっき起きた星坂さんの事件についてかいつまんで話した。
「なーんか。さっきの星坂さん、気になるんだよね。何かおかしいんだよね。でも、何がおかしいかわからないんだ」
私達子供は無力だ。クラスメイトがあんな事になってても、特に何か出来るわけじゃないし、違和感を感じていてもそれがなんなのかわからない。
でも、真里菜は今大学一年生。私達よりかは、何か知恵を貸してくれるかもしれない。それに信頼出来る。だからこそ、夏海も頷いたんだろうし。
真里菜はしばらくなにやら考えていたようだけど、急に顔を上げて言った。
「おかしい所は、ある」
「たとえば？」
「星坂って子は、自分で普通に帰れたのよね。じゃあ、なんで教室で倒れてたの？　そんなに浅い傷なら、とっとと帰ればいいじゃない。それに、なんで自分の手首を切った人の名前を言わないの？　それに、可奈子ちゃんの鞄を間違えて持って帰って、生徒会室でうまい具合に可奈子ちゃん達が星坂さんを見つける。こんな偶然、ありえる？」
目の前が真っ白になる気がした。確かにそうだ。星坂さんがなんであんな浅い傷で倒れてたのか、なんで犯人の名前を言わないのかは、もちろん不思議に思ってた。でも、確かに私達が星坂さんを見つけたのは、偶然とは言いがたい。
梨花は本当に偶然だとしても……。確かに、納得出来る話しじゃない。
「リンチ事件の方でも、星坂さん絡んでるしね。なんか怪しいよね」
夏海はブラックコーヒーをおおげさに啜り、静かに言った。
「私ら、ハメられてる？」
「んー。はっきりとそうは言えないけどね。ハメるといっても、誰かどんな理由で、何があったからハメてるんだろう。何がきっかけで、何があったからハメることになった？　ハメられるような事とか、恨まれる事とか、貴方達はしないでしょ？」

夏海は黙った。そりゃ何がなんだかさっぱりわからない。
これまで黙って真里菜の話しを聞いていたりこが、静かに喋りだした。
「私が思うにね、鞄は間違ったんじゃなくて、やっぱりわざと持って行ったと思うんだ。で、生徒会室に行くってクラスの人に言ってたらしいじゃん。それさ、明らかに私達を誘導してない？」
私達は頷きあった。りこの言うとおりだ。それしか考えられない。とりあえず、今はその考えで話しを進めるのがいいだろう。
でも、これで一つの謎は一応解決したとしても、それだとまた新たな謎が起きる。
手首切ってる姿を私達に見せて、何がある？　つーか、それだと星坂さんは自分で手首を切ったと考えるのが自然だ。犯人の名前言わなかったし。
そして視点をずらして考えると、梨花は本当に偶然あそこにいたのか？　怪しいもんだ。梨花がセンセイに何かを相談するとは考えにくいし、梨花なら人の手首を切るくらい、平気だと思う。実際梨花は喧嘩で一度停学になっている。
でも一番気になるのは、やはり私達が偶然星坂さんを見つけたことだ。梨花はとりあえず置いといて、私達が星坂さんを見つけたことに、なんの意味があるんだろう。
いや、発想を変えるべきか。本当に星坂さんは私達を誘導したのか？　そうと決め付けるのさえ、早いかもしれない。まだ、隠されているであろう真実が全く見えてこない。
でもいくら考えても、何もはっきりとわからない。
突然、奈々が大きな声で言った。
「ねぇ。やっぱおかしいよ、梨花」
夏海は難しい顔をして、「なんで？」と聞いた。奈々がコーヒーを飲み、答える。
「だってさ、あの梨花だよ。相談したいことがあったなら、わざわざ作業が全部終わってからにすることないじゃない。作業を途中で抜けて聞くなり、もっと言えば、相談くらい昼休みにでもすればいいじゃない。それに六時だよ。ほとんどのセンセイたちはほとんど帰ってるし、特に野中は担任持ってないから、いつも結構早くに帰るよ！」
「確かに……」
やっぱり、梨花があそこにいたのは不自然だ。
わからない事ばっかり。ま、梨花のことは野中先生に聞けばわかるけど。
沈黙が流れた。マスターは真里菜が仕事をサボッていても何も言わないし、真里菜はうんうんと考えて知恵を絞っているようだし、りこは落ち込んでるし、

夏海は怖い顔で何か考えているし、奈々は深刻な顔をしている。
しばらく黙ってると、夏海が立ち上がった。
「どうしたの？」
「帰ろう」

次の日の昼休み、私は情報処理室にいた。野中先生に話しを聞くためだ。
でも、どうやって聞いたらいいんだろう。いきなり昨日何時に帰ったと聞くのは怪しまれる。うぅん。どうしよう。よし、こういう時はシミュレーションだ。ねぇ野中せんせぇい。いつも遅くまで仕事してるのぉ？　何時くらいまでぇ？　なによ可奈子わざわざそんなことを聞きにここまできたの？
……ダメだ。絶対そうなる。ま、困ったときは夏海よね。でも、いちいち教室まで戻るのは面倒だから、電話で失礼しようかな。
夏海に電話をかけると、第一声「死ね！」と言われた。いつもと違って、甲高くてよく通る声。
「親友に向かって死ねはないでしょ。死ねは」
「お前な。私は今絶賛トイレの中なんだよ。しかも、学校で電話をかけるな」
「いや、トイレの中とはいえ、電話に出るアンタもアンタだと思うよ」
「可奈子が言うなよ……」
とか言って、ちゃんと電話に出てくれるなんて、夏海は優しい。そう、超がつくほど優しい。
「ていうか、今どんな格好で電話してんの？　想像しただけでマジ笑えるんだけど」
「うるさい。いいから、用件言え」
「うん。あのね、野中先生に昨日学校に何時までいたか聞きたいと思って。でも、なんて聞いていいかわからないの」
「頭使え。あ、た、ま。梨花が最近悩んでるみたいで、それについて色々聞きたいんです。もしかして昨日相談しに来ませんでしたか？　とか言えばいいだろ」
「夏海は使える女だなぁ。じゃね！」
最後、なにやらぎゃあぎゃあわめいてたけど、無視して電話を切った。
諸葛孔明夏海のアイディアを使えば、野中先生からすんなり聞きたいことを聞けそうだ。情報処理室の前で軽く深呼吸をして、ドアを開ける。
野中先生は一番前にある、教師用のパソコンをいじっていた。
私が入ってきたのに気づくと、ニコリと笑った。私はこの先生が大好き。ちょっと抜けててぼんやりしてるけど、人格がとても良い。教師がみーんな野中

先生ならいいのに。
「先生何やってるの？」
「日ハムの試合結果見てたの」
「ふぅん。ね、先生。加藤梨花って知ってる？」
「え～。知らないよ」
素で、お笑い芸人のようにずっこけそうになった。詳しく聞くまでもない。野中先生は私らH組の情報担当なのに、名前すら覚えていない。
しかし、これで梨花の嘘は確定した。
こうなると、星坂さんをやったのは梨花だと考えるのが自然だ。あの時、犯人を言えなかったのもそうだ。梨花を目の前にして言えるわけがない。
でも、それだと一つ気になることがある。あの時の梨花は、星坂さんを見てうろたえ、凄まじいスピードで星坂さんをかついで保健室に走って行った。
私は、あの梨花が演技をしていたようには全く見えない。梨花は素で混乱して、心配してた。人間、とっさにあんな演技が出来るものか？
でも、梨花なら人の手首を切るくらい、平気でやる。私は梨花の暴力を何度か見ている。でも、別に嫌いじゃない人に対しては案外危害を加えないタイプだとも思ってる。
うーん。どういうことだろう。それに嘘をつくんなら、別にあの時野中先生に会いに行ったけど、いなかったと言えばいい。それなら嘘をついてても、私は梨花の嘘に気づくことはなかっただろう。……そこまで頭回らなかったのかな？
とりあえず、これ以上ここにいてもどうしようもない。私は「そっか。じゃ、帰るね」と言い、情報処理室を後にした。野中先生は首をかしげていたが、笑顔で「さよなら」と言ってくれた。
教室に戻り、三人に梨花の嘘が確定したことを告げると、三人ともやっぱりね。と呟いた。更に話しを広げようとしたけど、そこで昼休みは終わってしまった。
今日の五時間目は、総合という未だによくわからない時間だ。今日は、医療番組を見るらしい。興味ないので後ろの席のりことぐだぐだ話しながら時間を潰す。
途中、オペの映像が流れて、大量の血が流れる場面があった。そこでりこは「キャッ」と可愛い声をあげた。私は別にグロいものを見ても特にビビらない。夏海は微動だにしないし、奈々はぐぅすか寝てる。腹立つことに寝顔も美人。
ふと星坂さんを見ると、なんと驚くことにニヤニヤ笑っていた。不気味だ、と思った。大量の血より、そういう映像を見て笑ってる人間の方が、よっぽど

恐ろしい。
血を見て、なんで笑えるんだろう？　ちょっと、星坂さんは変わってるのかもしれない。
突然ドアが開き、担任が私を見て手招きした。そしてりこと夏海にも目を配らせ、「千瀬、起きろ」と大きな声で言って、すぐに廊下に引っ込んでいく。
奈々は不機嫌な顔で教室のドアを睨むと、のそのそと立ち上がる。それを合図にしたかのように、私らも立ち上がり、廊下に出る。
奈々がぶっきらぼうな声で聞いた。
「何よ？」
「校長が呼んでる」
「は？　また？　つーか、今度ばかりは私、場合によっては殴るよ」
「殴りたければ殴れ。俺は別にお前が退学になっても全然気にしない」
ダメだ、この担任。終わってる。なんでこんな神経持ってるやつが教師なんかになったんだろう。人生ってのは本当に不思議だ。なんで野中先生みたいなのが担任持たないで、こんなアホなセンセイが担任持ってるんだ。
りこが上目遣いで睨みながら言った。
「校長はなんて言ってるの？」
「知るか、そんなの。早く行け」
りこは溜息をして、歩き出した。私達もりこに並んで歩いていく。途中、私が夏海に「キレちゃだめだよ」と忠告したら、夏海は苦笑いした。
キレちゃだめだよ。この台詞は、中学三年間、高校一年生。計四年間、私が夏海に言われ続けてきた言葉だ。私はキレやすい性格で、すぐに突っかかってしまう。
でも、夏海や色々な友達の影響などで、私は大分落ち着いたと思う。自分で言うのも変だけど。
だから、私は滅多に怒ることは無くなった。そして夏海はもともとキレることはしない性格。何があっても、声を大にして怒ることはない。でも、それはあくまでも自分の身に降りかかったことに限る。
確かに自分に間してのことでは怒らないけど、友達のためならすぐにキレる。夏海に一度火がつくと、簡単には止められない。友達が何か言われると、百倍返しで反撃する。
助けてくれるのは嬉しい。でも、それで夏海が色々と勘違いされてしまうのが私は耐えられない。
校長室の前に着くと、夏海はノックもせずに、まるで道場破りでもするかのように豪快にドアを開けた。その先には、目を大きく見開いている校長

と、気まずそうな顔をした教頭がいた。
夏海がドアを開いた勢いで言った。
「なんですか？」
「……昨日、星坂優衣菜という生徒が、生徒会室で手首切ってたんだってね。で、見つけたのは君達だっていうじゃないか。それで、私はそれが偶然だとは思わない。平倭先生が犯人は君達だと言い、そして今回の件だ。さすがにこれを偶然で片付けるのはおかしいと思わないか？」
夏海と奈々が、ぶるぶると震えている。相当我慢してる。私だって、こいつに飛び掛って殴りたい。ここは、私が何か言わなきゃ。
「確かに見つけたのは私達ですけど、一番最初に見つけたのは梨花ですよ。なんで梨花は呼ばれてないんですか」
そう言うと、校長と教頭が「え？」という感じで、マヌケな顔になった。梨花が見つけたことは、知らない？
「え、知らないの？　つーか、星坂さんの件、誰に聞いたの？」
「それは言えない。それで……。うん、そうだな。えぇと。君達は、見つけただけか？」
「当たり前じゃん」
そう答えると、校長は「戻っていい」と呟いた。
どういうことだ、これは。
私達は教室には戻らず、一階に降りて、木造の渡り廊下から中庭に出てベンチに腰かけた。教室に戻る気なんてしない。
新校舎と木造の旧校舎。四階から見下ろすと、この学校はコやロの字に見える。柔道場やらなんやらが後からくっつけられ、なんともちぐはぐな校舎だ。狭い中庭は、そのちぐはぐな校舎に囲まれている。
りこは購買で買ったバナナオレを飲みながら、鋭い眼差しで言った。
「梨花ちゃん嘘ついてたし、星坂さんやったのはやっぱり梨花だよ。校長は梨花のことについて、何も知らなかったしさ」
私と奈々はうんうんと頷いたけど、夏海は腕を組んだまま、厳しい顔つきで「いや」と呟いた。
「梨花が怪しいってのは、私も思ってた。実際、嘘ついてたしね。でも、星坂はそれ以上に怪しい。まず、あそこでぶっ倒れてたことからして、真里菜の言うとおり変だよ。確かに血は出てたけど、普通に自分で帰れたじゃん。なんでわざわざご丁寧にあそこで倒れてた？　それに梨花がやったんなら、すぐに逃げればいい。でもあいつは、教室の前で素で驚いてた。あれは演技に見えない」
確かにそうなんだよなぁ。

でも、今は梨花について考えた方が近道だと思う。
ていうか、私達は何もしてない。ふりまわされてるだけだ。こんな事って、あっていいのかな。あっちゃいけないよね。でも問題は、そこじゃない。人生生きてたら、自分は悪くないのに、嫌なことに巻き込まれることは残念ながら必ずある。避けられない。大事なのは、今みたいに理不尽なことが起きたとき、諦めて何もせずに事の成り行きを見て、結果的に後悔するのではなく、何が出来るわけじゃないと思っていても、何か行動に移すことだ。私達は指を咥えて黙ってるほど、やわじゃない。それに、頼れる友達もいる。
奈々が足を組み替えて、深刻そうに言った。
「梨花に直接聞くしかないよね」
「でもさ、聞くと言っても、あの梨花だよ。静かに話し出来る相手じゃない」
私がそう言うと、りこがバナナオレを飲み干して言った。
「大丈夫だよ。こっち四人だし」
夏海が呆れて言う。
「もう喧嘩腰か。でも、確かに梨花と普通に話し合うなんて無理だよなぁ。奈々、どうする？」
「ぐだぐだ考えててもしょうがないよ。あぁ、もうっ。面倒くさいから梨花呼び出すわよ。放課後、学校裏の参角山のふもと。いいわね」
奈々のこういう所が好きだ。面倒くさいことはいちいち考えない。考えるよりかは、さっさと行動に移す。
奈々がもう一度「いいしょ？」と確認したので、頷く。夏海はニヤリと笑い、りこは意外にも怯えた感じはなく、静かに頷いた。りこはいざとなった時は、結構肝据わってんだよね。
奈々はクラスのギャル系の子にメールをし、梨花のアドレスを教えてもらい、超早打ちでメールを送信した。
喧嘩にならなきゃいいけどなぁ。もしそうなったら……。
夏海止めるの大変だし。

頭の中でまとめてみようとしたけど、全然まとまらない。
リンチ事件に居合わせ、生徒会室で手首を切って倒れていて、しかも様子のおかしかった星坂さん。そして生徒会室で星坂さんを見つけた私達。そして、私達より先に星坂さんを見つけて、野中先生に用があったと嘘をついた梨花。
何がどう、リンクしてる？　なーんにもわからない。こういうことって、難しいな。数学はどんなにわからなくても、教えてもらってれば、答えが存在してるからいつかは解ける。でもこういう問題は、まず答えそのものが隠れてい

るから、解決のしようがない。
確かに私は勉強は苦手だよ。でも、人間大事なのはそこじゃないんだ。
私達は放課後、すぐに参角山のふもとへ向かった。とても小さな山。風が強い。
十分ほど待っていると、遠くからセーラー服が見えた。背がでかく、アホみたいな超ミニスカート。ボリュームのある髪。大きくてギラギラした瞳。濃すぎず薄すぎずの化粧。どう見ても梨花。
梨花はこちらに近づいてくると、凄まじい剣幕で「何？」と聞いた。夏海が一歩前に出る。夏海も梨花に負けないくらいの剣幕。なよなよした男子ならあっという間に逃げ出すだろう。
「アンタ、嘘ついただろ。あの時、なんで四階にいた。ほら、言え」
梨花は不気味にニヤリと笑った。
「お前らさ、私をここに呼んどいて、私の事情を話せっていうの？」
「そうだよ。早く言え。なんで嘘ついた？　星坂の手首切ったの、お前か？」
夏海が低い声でそう言うと、梨花はニヤニヤ笑い出した。奈々が「キモイから止めてくんない？」と、エロ本を読んでる男子を見るかのような目で、梨花を睨みながら言った。
私も、なんか言っておこうか。こういう時は、たたみかけるのがベストだ。
「嘘バレてんだから、言いなさいよ。笑ってないでさ。何かやましいことでもあるの？」
梨花はほっぺたを掻きながら答えた。
「うーん。別に言ってもいいんだけどさ。言ったところで、別に私に害はないし。でも、なんか言うのはしゃくだなぁ」
夏海はイライラしだして、梨花に数歩近寄った。不味い。なるべく梨花を激情させず、温和にことを済ませなくては。梨花は本当のことを言っても自分に害は無いらしいし、うまくいけば普通に教えてもらえるかもしれない。
りこが私の目をチラリと見た。そうだ。こういう時は、普段冷静とはいえ、根っこは血の気の多い夏海より、温和なりこの方がなんとかしてくれそうだ。
と思った瞬間、夏海が怒鳴った。
「なんで嘘ついたかって聞いてんだ。もったいぶらないで言え！」
すると、梨花は当然夏海に突進した。私達はすぐに梨花に駆け寄り、梨花を押さえ込む。
でもダメだった。梨花はでかいし、力もある。非力な私や奈々はあっという間に吹き飛ばされ、りこは梨花の手前まで駆け寄ったところで、ハデに転んだ
梨花は夏海の首を片手でつかみ、思い切りギリギリと締めた。夏海の顔が一

気にゆがむ。
「こんな所に呼び出されて、気分悪いんだよね」
私はすぐに立ち上がり、梨花の腕を放そうとしたけど、その腕は夏海の首から離れない。ヤバイ。これはヤバイ。
しかし夏海がおとなしくしてるわけもなく、梨花のほっぺたに強烈なビンタを食らわせた。ひるんだ所で、私と奈々は近距離から梨花にタックルし、それでも倒れない梨花をなんとか引っ付かんで抑えた。
そして、いつの間にか立ち上がっていたりこが、梨花の背中に飛びついて細い両腕を首にまわして、ぶら下がった。
「ちょ、りこちゃん邪魔しないでっ。ね！　私は今この笠原たちにムカついてるの。アンタは関係ないでしょ。つーか苦しいから！」
「り、りりり梨花ちゃん落ち着いて。あのね、私達は星坂さんがなんであそこに倒れてたのか、知りたかっただけなの。でも梨花ちゃんが嘘ついてるってわかっちゃったから、どうしてかなって思って。で、でもねっ。梨花ちゃんあの時、素で驚いてたし、星坂さんをすぐに保健室に連れてったからさ、梨花ちゃんの事は疑ってないよ。ただね、あのままじゃ私達と梨花ちゃん疑われちゃうじゃん。見つけたの私達なんだし。だから、本当のことを知りたくてさ。嘘ついてると怪しまれるよ」
私と奈々は火事場の馬鹿力で梨花を抑え、りこはまだぶらぶらと首にぶら下がっている。梨花はなんとかりこの腕を掴み、ギリギリで息を吸っている。しばらくかた膝をつきながらゲホゲホしていた夏海は立ち上がり、梨花を上目遣いで睨んだ。
さすがに、首が苦しいのに加えて数で勝ち目が無いと思ったのか、梨花は暴れるのを止めた。りこは腕を放し、着地した。梨花はしばらく首を押さえて激しく息を吸ったり吐いたりした後、わめくように言った。
「あー面倒くさい面倒くさい。情報処理室にいる野中に用があったのは本当なんだよ。あの人と話したことはなかったけど、なんか信用出来そうな人だったから。でも、いなかったんだよ、野中。しょうがないと思って情報処理室を出たら、木下が廊下歩いてたんだ。私が声かけたら、あいつアホみたいに驚いた顔してさ。で、私はあいつのことカモにしててね。喉渇いてたから、飲み物代よこせって言ったんだ。そしたらあいつ、何故か一万円くれたんだ。どうしてこんなにくれるんだって聞いたら、俺がここにいたことは絶対言うなって言い出した。訳わかんねぇよ。金渡したら走って逃げたし。そして帰ろうと思って生徒会室の前を通ったら、星坂を見つけた。その時、アンタたちがやってきたんだ」

私と奈々は梨花を解放した。梨花は唾を吐き、夏海にガンを飛ばして帰って行った。
しばらく、私達は黙り込んでいた。これだけ騒げば、何も喋りたくなくなる。興奮してるから、何を言えば、何をすればいいかわからない。
でも、一番興奮していただろう夏海は、ケロっとした顔で「あいつは白だな」と呟いた。恐ろしい女である。
「な、夏海大丈夫？」
「可奈子こそ、思い切り吹っ飛ばされてたじゃん。奈々もハデに吹っ飛んだし」
「わ、私は別に大丈夫だけど……。夏海、無理しすぎ」
「そうだよ夏海ちゃん。本当に大丈夫？」
「だから、大丈夫だって」
夏海は苦笑いしてみせた。
ほんっとに、無理しすぎだよ。今回はりこの機転の良さでなんとかなったけど、りこがいなかったらどうする気だったんだ。この子はとても危なっかしい。自分一人のことなら、ここまでやらない。ていうか、行動さえ起こさないと思う。でも、今回のことは四人の問題だ。夏海は自分はどうなってもいいけど、私達三人のために全力で動いてる。
夏海は友達のためならなんでも出来る。それはとても凄いことではあるけれど、少しは自分のことも大事にしてほしい。
私はなんだか力が抜けて、座り込んだ。制服は土がついてて汚い。最悪。だいたい、梨花がバカだからいけないんだ。野中先生いなかったなら、いなかったと言えばいいのに。嘘を言うのに、いちいち頭が回らなかったんだ。だからややこしいことになっちゃったじゃないか。ま、そのおかげで嘘に気づけたんだけど。
奈々が、ボソッと言った。
「木下、か」
今名前に出てきた木下は、一応知ってる。Ｉ組にいる地味な男子。下の名前は知らない。梨花がよく木下をカツアゲしていたのは知っていた。
「ねぇ、木下が四階にいたってことは、木下が星坂さんをやったのかな？」
「その可能性は、もちろん超高い。あいつ気弱いから、問い詰めればなんとかなりそうだけど……。さすがに、ね」
と、夏海はまた苦笑いしながら頭を掻いた。
確かに、またこのような事をするのは嫌だ。それに、私達は別に不良でも喧嘩が好きなわけでもなんでもない。ただ、今回は相手が梨花だったから、止むを得ず梨花と私達の五人でゆっくり話しを出来る環境を作ったのだ。呼び出し

て、私達は本気なんだぞ、って感じで。
……呼び出す？
「ねぇ、今更だけどさ。なんで私達、人気の無い山のふもとに呼び出したんだろう？　別に、喫茶店で良くなかった？　お店なら、梨花も暴れれないし」
夏海とりこは「あ」と呟き、呆然とした。特に深く考えてなかったらしい。
急に、奈々は自嘲するような笑いを顔に浮かべた。
「何笑ってんのよ。アンタが言い出したのよ」
「いや、なんていうか。確かに深く考えてなかったわ。ただね、梨花からしたら、どこからかメルアド調べられて、いきなり喫茶店に来いなんて言われても、すっごい困るだろうし、怪しむと思うんだ。だから、多分喫茶店じゃ九割来なかったと思う。でも山のふもとっていう、人気のない所ならさ、何か腹割って話したいことがあるんだなぁって、梨花は思うんじゃないかと思って。でも、それだけ。特に大きな理由があったわけじゃない。なんつーか、ノリ？」
結局、私らはいつも、確固たるものがあって動いてるわけじゃない。無鉄砲で、何が正しいか正しくないかもわからない。
目の前にある絶望という壁を、思い切り殴って破壊できるわけでもない。私達は無力だ。でも、それはみんな同じ。
何かをやり遂げたとき、人は無力じゃないと言えるんだと思う。私は何もしないでぐだぐだしてるのは嫌だ。今回はこんな事になっちゃったけど、なんとなく事件の真相が見てきた気がする。終わりが近い。
全てが解った時の事を考えると怖いけど、ビビっててもしょうがない。人生は、嫌でも一歩を踏み出さなきゃいけない時がある。その一歩をためらってしまうと、人生はそこで止まったまま、動かない。
いやぁ、全く。人生って辛いね。
でも辛いということは、生きがいがあるということだ。私はそう思う。

金曜日。ついに土日の香蓮祭を翌日に控えた。
クラスのほとんどが昼間から学校に行き、最後の準備をする。つっても、そこまで沢山やることがあるわけじゃないけど。
香蓮祭は、いまいち盛り上がりに欠けている。毎年、そうだ。ステージ発表は確かにあるし(私は出ないけど)、そりゃ出店も沢山あるけど、出店は全て食べ物。私らみたいに、食べ物以外の店を出すのは、少なくとも私が入学してからは始めてのことだ。一年の時も二年の時も、食べ物屋しかなく、とても不思議に思ってた。
フリマの方だけど、数にして数百個集まった。部屋のそこら辺に転がってる

小物を大量に持ってきた人が多くて、アクセサリも結構揃ってる。ゲームや漫画やら雑誌やら服やら、定番の物は数も質も、どこのフリマにも負ける気はしない。

「奈々、アンタ今日ばかりはちゃんと何か持ってきたよね？　化粧道具沢山持ってきてくれたのは嬉しいけど、他にも何かほしいよ」

「え。可奈子に似たＡＶ女優の写真じゃやっぱダメなの？」と、奈々はふざけた。見た目はどう見ても清純系なんだけどなぁ。

「ダメに決まってるでしょ」

そう言うと、奈々はやけにゴツい鞄のチャックを開け、アンプと小型スピーカーを机にどしんと置いた。

「これでどうだ。音響メーカーのアンプに、サテライトスピーカー。結構高く売れるっしょ？」

「良い物あるんじゃない……。ていうか、こんな良いもの、本当にフリマに出していいの？」

「うん。あんまり使ってないし、可奈子頑張ってるし」

奈々は顔を少し赤らめながらそう言った。奈々とアンプとスピーカーに拍手を送りたい。

今日、夏海は学校近くのゴミステーションから拾ってきたギターを、えっちらほっちら担いできた。「いやぁ、ケースないからマジ恥ずかしかったよ」と夏海は笑ってたけど、絶対本人は微塵も気にしてないと思う。夏海は、周りの目を気にしない図太い性格だ。多分この子なら、亀でも豚でも蛇でも、平気な顔して持ってこれると思う。

りこはこれまでに沢山持ってきてくれてたけど、今日もＣＤやぬいぐるみを持ってきてくれた。

後ろにズラリと並べた机に、商品を並べる。ギター。ＣＤ。漫画。ゲーム。ぬいぐるみ。アンプ。スピーカー。服。アクセサリ。化粧品。お菓子の空き箱。中身がほとんどないワックス。乾電池。ハサミ。誰かの数学の教科書。

……あれ？

「ちょっと！　なんで立派な商品にガラクタ紛れてるのよ！」

つい私がそう叫ぶと、ガラクタを机に並べていた夏海と、数人の女子がキョトンとした顔になった。

「でもな可奈子。数は多い方がいいだろ」

「ワックスとか電池とか、ゴミでしょ！」

「まぁ、何かの抱き合わせにどうぞ、みたいな」

「ていうか私の教科書を勝手に商品にしないで！　いつの間に置いたのよ」

「無くした人、もしくは来年三年になる二年のために」
「アンタねぇ……」
夏海は「半分冗談だよ」と言ったけど、電池とハサミを床に投げ捨てただけで、他のガラクタを残したまま、別の作業に移った。そして「私の使用済みの口紅は当然高くするわよ」とか一人で呟き、誰かが突っ込んでくれるのを待っている奈々を無視して、私は値段を紙にひらすら書いた。
えぇと。これ終わったら……。あぁ、そうだ。ダーツと射的でも商品もらえるから、値段とは別にダーツの得点でも分けないとなぁ。
ふと梨花を見ると、だらだらはしているものの、一応ちゃんと作業はしている。梨花なら授業無い日に来ても単位は減らないんだから来ないと思ってたのに、いまいち読めない女だ。
作業を黙々とやってると、突然りこが「あっ！」と叫びだした。
「ど、どうしたのりこ」
「廊下、廊下」
そう言って細くて小さい人差し指で廊下を指差した。
廊下には、クラスTを着た人たちがうろうろしていて、壁に色々なポスターが貼ってあり、賑やかだ。でも、それがどうかした？
そしてよーく見ると、髪がぺったんこで癖毛の、地味な感じの男子が目についた。あれは、木下だ。眼鏡をかけた男子と話してる。
木下に話しを聞かなくちゃダメだ。木下に話しを聞けば、事件の真相がかなり見えてくるはずだ。星坂さんは今日来てないから話し聞けないし、あの子はなんとなく、何も喋ってくれなさそうな気がする。
私は夏海と奈々を手招きし、木下を指差した。木下に気づくと、夏海が「どうする？」といった顔で私を見る。
うーん。四人で押しかけてもアレだよなぁ。
「奈々、聞いてきて」
「いいけど。私一人？」
「うん」
「どうしてよ」
「アンタが話しかければ、男子もさぞ喜ぶでしょ」
「モテない男子なんか、女子に話しかけられればだいたい喜ぶわよ」
「それは、可愛くない私でも十分って事かしら」
奈々は「可奈子って、自分が可愛い顔してるっていう自覚、無いよね」と小さな声で言うと、教室をスタスタと出て行った。
私なんか別に可愛くないよ。童顔だしさ。

さて、奈々はどうするだろう。私達はドアの近くの椅子に座り、作業をするフリをして奈々と木下をじっと見守る。
奈々は木下の前に、すーっと出て行った。
「ねぇ、貴方木下君でしょ」
木下は、アホみたいに驚いた顔をした。夏海が噴出した。
「おい。あいつ奈々みたいな女に話しかけられて、完全にキョドってるぜ」
「バカ！　聞こえるって」
木下は、どう見てもうろたえている。目は泳ぎ、「え、あ、あの。え？」とかぶつぶつ呟いてる。情けない男。女に話しかけられたくらいで、普通そんなに慌てるか？
奈々がどう出るかと見ていたけど、奈々は何故か本題に入らない。りこが首をかしげた。
「どうしたんだろ？」
私はハッとした。
「あ、あの子。どうやって聞いていいかわかんないんだよ」
夏海は文字通り、頭を抱えた。
奈々はこちらをチラチラ見ている。うかつだった。ここは夏海に行かせるべきだった。こういう時、スラスラと話せるのはやっぱり夏海だ。それに奈々じゃなくても、夏海ほどの美人で、大人っぽくて、どことなく色気のある女に話しかけられれば、男子は九十九パーセント喜ぶだろう。
えぇと。ど、どうしよう？　奈々は私を見る。私は夏海を見る。
夏海は溜息をして、私とりこの頭をわしづかみ、ぐいっと引っ張って自分の口元に寄せ、小声で言った。シャンプーの良い匂いがする。
「……ストレートに聞くのがいい。ほんっとうにストレートに。星坂の名前も出すんだ」
それをどう奈々に伝えよう。カ、カンペ？　ノートに書いて、それを奈々に見せるか？　いや、それだと怪しまれるどころじゃない。そんなバカげたことじゃなくて、えーと。
私が悩んでいると、夏海は私を引っつかんで無理やり立たせ、廊下に突き飛ばした。
木下がビクッと震えた。あぁ、もうっ。
「ねぇ木下君。木下君ってＩ組だよね。準備は順調？」
「あ、うん。まぁ、そうだね」
「そうなんだー。木下君って、準備人一倍頑張ってるもんね」
「え？」

「だってさ、昨日四階にいたじゃん？　一人で何やってるか気になってたの。だって、四階は学校祭では使われないしょ？　なんで四階にいたのかなって。そういえば昨日、星坂さんが生徒会室で倒れてたんだよねっ」

と、私はお好み焼き屋のバイトで培った営業スマイルの技術を、いかんなく発揮した。人生、笑顔は大事だ。女はニコニコ笑って愛想良くしてれば、ちやほやされやすい。特にバカな男にはね。

木下は顔が真っ白になった。

「え、いや。別にっ」

「別にってことないじゃんさぁ。なんかやましいことでもあるの？　梨花に聞いたんだけどなぁ」

梨花、という言葉が決定的だったのか、木下は一気に諦めの表情になった。

でも木下は何も喋ろうとしない。それどころか、一歩踏み出し、逃げようとした。でも、奈々が邪魔する。教室を見ると、夏海がおなかを抱えて爆笑している。

こっちは、超真剣なんですけど？

奈々が「ねぇ、何してたの？」と、ちょっとキツイ口調で言うと、木下は下を向いて言った。

「俺は、何も知らない！」

そう言って、奈々の横を通り過ぎて行った。階段を降りて行き、姿が見えなくなる。

逃げられた。どうしたものか。

溜息をして教室に戻ると、りこが「やっぱり、木下君が何か知ってるね」と言った。

「そうでしょうよ。でも、あいつ口を割りそうになかった」

追いかけて問い詰めたい気もするけど、今やるべきことは、私達の個人的な問題ではなく、クラス全体でやる学校祭の準備だ。それに、こんなことで最後の学校祭の準備を怠りたくは無い。私は、いつになく真面目なのだ。

作業を続けていると、気づけば午後二時。もうほとんどの作業は終わり、あとは景品を綺麗に並べたり、値段の見直しをするくらいかな。

皆飽きてきたのか、友達が私の髪の毛をいじってきたり、男子がエアガンの試し撃ちをしたりしだした。

さすがに私も飽きてきたけど、なんとか作業を続け、午後三時には、全ての準備が終わった。

終わったら、力が抜けた。あぁ、もう本当にやることが無くなった。男子はさっさと帰り、女子は床に座ってだべっている。

あとは当日を迎えるのを待つのみ。楽しみだけど、ちょっと残念。旅行は、行く前の計画している時が一番楽しい。それと同じで、学校祭もやっぱり準備してる時がとても楽しい。

ま、学校祭が準備してる時より楽しくなるかは、自分達次第だけどね。

りこが私の背中に抱きついて、「疲れたしおなかすいたから、コンビニでなんか買ってきて、中庭で食べよー」と言い出したので、私達は学校を抜け出し、コンビニで適当にジュースとお菓子を買い、中庭のベンチに腰掛けた。

夏海がかりんとうを噛み砕きながら、私に聞いてきた。

「木下、どうする？」

「アンタかりんとう食べるなんて渋いね。……どうしようね。やっぱ星坂さんに聞くしかないのかな」

「私が思うに」と言って、夏海はジンジャエールをごくごくと飲んで私達の目を真剣に見つめた。

「リンチ事件の犯人だけど、もしも私達の知ってる奴を疑うなら、木下がクロだ」

「どうして？」と、奈々が聞いた。

「消去法だよ。まず星坂。あの子はリンチ事件の時、空き教室にいた。そして生徒会室で手首を切られていた。リンチ事件はともかく、手首切って倒れてたのは、あまりにも不自然だったね。で、多分手首切ったのは星坂さん本人だ」

「どうしてよ」

「他人が切ったんじゃ、あんなうまく浅い傷で切れるか？　出すぎず、でも浅すぎず。私はそんなうまくやれる自身はない。それに、これは感情論になっちゃうけど、あの子は授業で医療番組見てるとき、血の映像を見てニヤニヤしてた。あいつなら、多分、自分で手首切って血が出ても、平気だろ。なんにしろ、リンチ事件も生徒会室での事にしても、あの子は一応被害者だ。どう考えてみても、あの子が犯人だとは考えづらい」

夏海がそう言い終えると、奈々が難しい顔で反論した。

「ぜんっぜんピンとこないんだけど」

「うっさいなぁ。とにかく、犯人の可能性を考えにくい奴はシロ。今はそう考えるしかないだろ。私達はシャーロックホームズじゃないんだよ」

ま、そりゃそうだよね。

夏海がかりんとうを豪快にガリガリと噛み砕き、続けた。

「で、梨花だな。こいつは完全にシロだろ。こいつは、たまたま四階に行って、どうしてだかわからないけど、木下に金をもらっただけ。それに星坂を見つけたときの態度は、演技じゃない。明らかに素だった。それにもしも星坂の

手首切ったんなら、さっさと逃げればいい話しだ」
何か、わかるような気がした。奈々はなにやら考え込んでいるようで、りこは夏海の話の続きを促した。
「ここで、木下だ。こいつは怪しすぎるよね。まず、なんで四階にいたんだろう。やましい理由だったか、そうじゃないのか。でも、四階にいた理由を裏付けるものはハッキリとしてる。言うまでもないけど、何故か梨花に渡した一万円だ。木下は四階にいた事を知られたくなかった。という事は、今改めて言う必要もないけど、やっぱり木下が星坂をやったと考えるのが自然だろ」
でも、それじゃあ星坂さんのあの奇妙な態度についてわかってない。あの時の星坂さんは、おかしかった。どう考えても普通じゃなかった。そして木下が星坂さんの手首を切ったとしたら、何故？　そんな事して何になる？
夏海が声を荒げて、テーブルを叩いた。
「絶対に木下がクロなんだよ。確かに星坂の怪しい態度について説明がついてないけど、木下が強く絡んでることは確かだ。木下が何も言わなくても、星坂が説明してくれれば、全部わかるはずなんだ」
心臓の鼓動が早くなった。渡り廊下に、星坂優衣菜がいる。目が合う。
逃げるかと思ったけど、星坂さんはこちらにやってきた。三人も気づき、驚きの表情を浮かべる。
「話し、ちょっと聞こえた」
と、星坂さんは苦笑いしながら言い、「座って言い？」と聞きながら、ベンチに座った。
「結論から言うと」
かりんとうの袋を見つめながら、言った。
「リンチの犯人の一人は、木下だよ」
私は素直に驚き、夏海は「やっぱりね」と呟き、奈々とりこは困った顔をしている。
「で、私は犯人じゃないけど、グルなことは確か」
「詳しく話せ」と、夏海が睨みながら言った。
「うん。リンチをしようって言い出したのは、私の男友達二人だった。そっから、平輪に恨みを持ってそうな木下と、もう一人女の子を誘って、私入れて五人でやることになったんだ。でね、私は昔から平輪に好かれていたけど、さりげなく体触られたり、いやらしい目で見られてたの。それがたまらなく嫌でさ。でも私はリンチなんてしたくなかったから、他の理由で関わることにしたの。まず私は、平輪に進路のことで話しがあるって言ったの。そしたら案の定、平輪は誰も使ってない空き教室に私を連れてった。そして予想してなかったけど、

その教室には鍵があったの。で、平輪は鍵をかけた。何する気だったのよって感じ。そしてしょうがなく、みんな窓割って教室に入ってリンチしたわけ。私はすぐに逃げて、完全に被害者ぶった。実際、平輪は空き教室に私を連れて行った事実はあるんだし、私は体を触られたわけだし、校長やら教頭やらに直接言えば、平輪としても学校としても、ダメージは大きい。実際、空き教室に連れてかれて、体を触られたって校長に言ったら、青ざめてたもん。……それで、今回の計画は終わるはずだったのよ」

頭が混乱するのを抑えて、私は星坂さんを見た。

えぇっと。木下が犯人だったってことは、予想通り当たってた。そして怪しかった星坂さんはグルだったと。

でも、それから後の事件は、何故起こった？　そこが一番の問題だ。

「なんていうか、私はただ平輪に変なことされるっていう役だけなのよね。だから、主犯の四人とはあんまり、仲間意識みたいなのは無かった。そこが問題だったのよ。あいつらは佐伯さんたちが校長とか教師の一部に疑われている事を知って、せっかくだから佐伯さんたちを犯人に仕立てようと考えたの。平輪の狂言もあったしね。でも、私はそれを知らなかった。ただ木下にあの日、佐伯さんの鞄を持って生徒会室に行って、手首切って倒れてろって言われたの。全くもって意味がわからなかったけど、言うとおりにしないと次は私をリンチするとか言うんだもん。私は血なんて怖くないし、リスカもたまにするから、行為事態は構わなかった。そしてあの日、何が起こるのか本当にわからなかったけど、言われた通りにした。そして、加藤さんと佐伯さんたちが来た時、やっとわかった。どうして加藤さんがいるのかはわからないけど、このままじゃ、あのアホ校長は更に佐伯さんたちを犯人だと疑うってね。予想通り、木下は佐伯さんたちが犯人だと校長にちくったわ。私は丁度良い具合に傷を作ったから、木下は私を校長室に連れてって、校長に傷を見せたわ。校長、やっぱり佐伯達かって呟いてた。後から聞いたけど、加藤さんはたまたま居合わせちゃっただけで、木下がお金を渡して口封じしたらしいわね」

全てが解けた。いや、これは解けたっていうか？

こんなの謎でもなんでもない。くっだらねぇ。そんな幼稚な、アホらしい茶番でごまかせると思ったのか？　リンチなんて立派な犯罪なんだから、警察だって動いてる。一度か二度、刑事らしき人が学校に来ている所を見た。

でも、学校は星坂さんが体を触られたって言う証言は隠したんだろう。そして、さすがに平輪も狂言を警察に言う気にはなれなかっただろう。嘘だってすぐバレるんだから、言ってもしょうがない。ただ平輪は学校側に腹いせで私達が犯人だと、ガキみたいにわめいただけ。校長が私達のことを警察に言わなか

ったのは、疑ってはいるけれど、心の隅には平輪の狂言なんじゃないか。っていう気持ちがあるんだろう。だから、言わなかったんだと思う。もし警察に言ってたら、私達は警察に何か聞かれていてもおかしくないし。

でも、校長は平輪も私達もどうでもいいのだ。このまま、強引に教師の間で評判の悪い私達をおとなしく出来るとでも思ってたんじゃないか。平輪は、ずっと病院のベッドで寝てればいい。

ま、これは妄想にすぎないけどね。でも、妄想は当たってると思う。

バカバカしいよね。私達がどう考えようとも、何もしなくても、犯人が誰だかバレるのは時間の問題だ。こんなくだらなくてレベルの低い事件、あっという間に全てがバレるに決まってる。なにより、星坂さんが全てを学校や警察に白状すると思う。

私達はしばらく黙った。夏海も奈々もりこも、私と同じようなことを考えているだろう。くだらない。アホらしい茶番。バカな校長。

やりきれない。それが、世の中ってもんなの？

星坂さんが泣きそうな顔になりながら言った。

「まさか佐伯さんたちを巻き込むなんて、思ってなかったんだ。ただ、ダメな教師を潰して、それでスカッとして終わりだと思ってた。いやらしい話しだけど、私はグルとは言え、別に何もしてないから、バレても大丈夫だと思ってた。でも脅されて、知らなかったとはいえ佐伯さんたちが更に疑われるような事をしちゃった。それに佐伯さんたち学校で、昼休みとか休み時間とか、学校祭の準備中とかに、よく事件について話してるのたまに聞いてたんだ。だって、貴方達は静かな声で喋ってるつもりでも、声でかいからよく耳を澄ませれば聞こえるんだもん。それで、多分この子たちはかなり早く真実に近づくと思って……。もう、終わりだなって思ったの」

「もういい。黙れ」

と、夏海は鋭い目つきで言って、星坂さんを黙らせた。

星坂さんは確かにリンチしたけど、私達を巻き込む気はなかった。でも、世の中結果が全てなのだ。特に今回は、結果に至るまでの過程は関係ない。こういう事が起こってしまったのだ。実際、校長に何回も呼ばれ、完全に疑われてる。どうしてくれんのよ。でもそれを、星坂さんに言う気にはなれない。木下や、他の仲間に言うべきだ。

でもね、私たちはまだ十八歳。りこなんて、まだ十七歳だ。完全な大人といえる存在じゃないんだよ。高校生なんだから、いくら十八とはいえ、子供なんだよ。なんでこんな思いしなきゃダメなの？

「星坂さん」

「うん」
「私はあまり星坂さんを責めたくないけど、私達はとても傷ついた。すっごいショックを受けた。私達は、何も悪くないのにこんなに傷つかなきゃダメなの？貴方は私たちを巻き込むと知らなかったとはいえ、木下たちの仲間だったことは確か。……でも、やっぱりどうしても、今ここで星坂さんを罵る気にはなれない。強く憎むことも出来ない。かと言って木下とその仲間を罵っても、傷は消えない。ねぇ、私たちの怒りはどこに向ければいいのさ。私はどこを見ればいいの？　どこを見れば、傷は消えるの？」
星坂さんは、もう泣いていた。
損だ。そうだ、損したんだ。なーんにも悪いことしてない。ただ、学校祭の準備を頑張ってただけなんだ。なのに、とても損したんだ。
りこが、星坂さんをじっと見つめて言った。
「星坂さん、当然校長に全部言うんだよね」
「うん」
「そっか。でもね、一度ついた傷は、消えないんだよ。可奈ちゃんも夏海ちゃんも奈々ちゃんも、普段どおり明るく見えるけど、心の中には凄く暗い塊が重くのしかかってるんだよ。でも、強いから、いつも通りふざけたり、冗談言い合ったりしてるんだよ。楽しそうに見えても、心の中は凄くムズムズして、居心地悪いんだよ。今回の事が、頭から離れないんだよ。私達を巻き込む気が無くて、何も知らなかったのなら、星坂さんを心底恨む気にはなれないけど……。でも、許す気にはなれない。それが、人間ってもんだよね」
星坂さんは泣きじゃくりながら、うんうんと頷いている。
奈々は、下を向いて指をいじりながら、弱々しい声で言った。
「リンチのことは、別にどうでもいいさ。ダメな教師かどうなろうと、知ったこっちゃない。平輪の狂言は、まぁアンタたちには関係ないさ。でもね、アンタの仲間は平輪の狂言と、校長が私達を疑ってることを利用したんだ。でもそれを星坂さんは知らなかった。それはしょうがない。でも、りこの言うとおり、だからと言って許せるかよ。でも、恨む気にも、殴ってやりたい気にもなれない」
奈々はそう言うと、下を向いてまた指をいじり始めた。
一番何か言いそうな夏海は、意外にもずっと腕を組んで黙っている。でもよく見ると体は震えていて、今にも暴言を吐き出しそうだ。下手したら、ビンタでもしそうな雰囲気。
私だって、星坂さんに何か言ってやりたい。でも、言う気になれない。
いっそ、星坂さんもリンチに加わってて、わざと私達をハメてた方がよかっ

た。だったら、ここで思う存分罵り、怒りを星坂さんにぶつける事が出来た。
でも、それが出来ない。このあまりにも大きな理不尽な出来事。そして、傷。
木下にはなんと言ってやろう。でも、言ってどうする。むなしくなるだけじゃないか。起きてしまったことは、もうどうしようもない。
救いの言葉が欲しい。
そう思った所で、夏海が机を蹴り上げて立ち上がり、叫んだ。
「みんな許せないって言ってるけど、私はアンタを許す。私達はこんな事があってもお釣りがくるくらい、今が楽しいんだ。学校祭の二日間楽しめれば、こんなくだらない事、すぐに忘れてやる。アンタを許すくらい、どうってことないんだよ」
私達は、クスッと笑った。
夏海がそう言ってくれれば、私達は救われる。それに、夏海の言うとおりだ。私達は弱いけど、こんな事で落ち込むほどには弱くないと思ってる。
今見るべきものはこんなくだらない事件じゃない。明日と明後日の学校祭だ。